

2026年北西太平洋域における台風の見通し



Chris Hebert
Senior Meteorologist,
TropicsWatch Manager

2026年台風シーズン予測

El Niñoエルニーニョ現象の再来

2026 Season Forecast

28 Named Storms (+)
17 Typhoons (+)

30-yr Average

26 Named Storms
16 Typhoons



2026年リスク地域

今シーズンの見通し

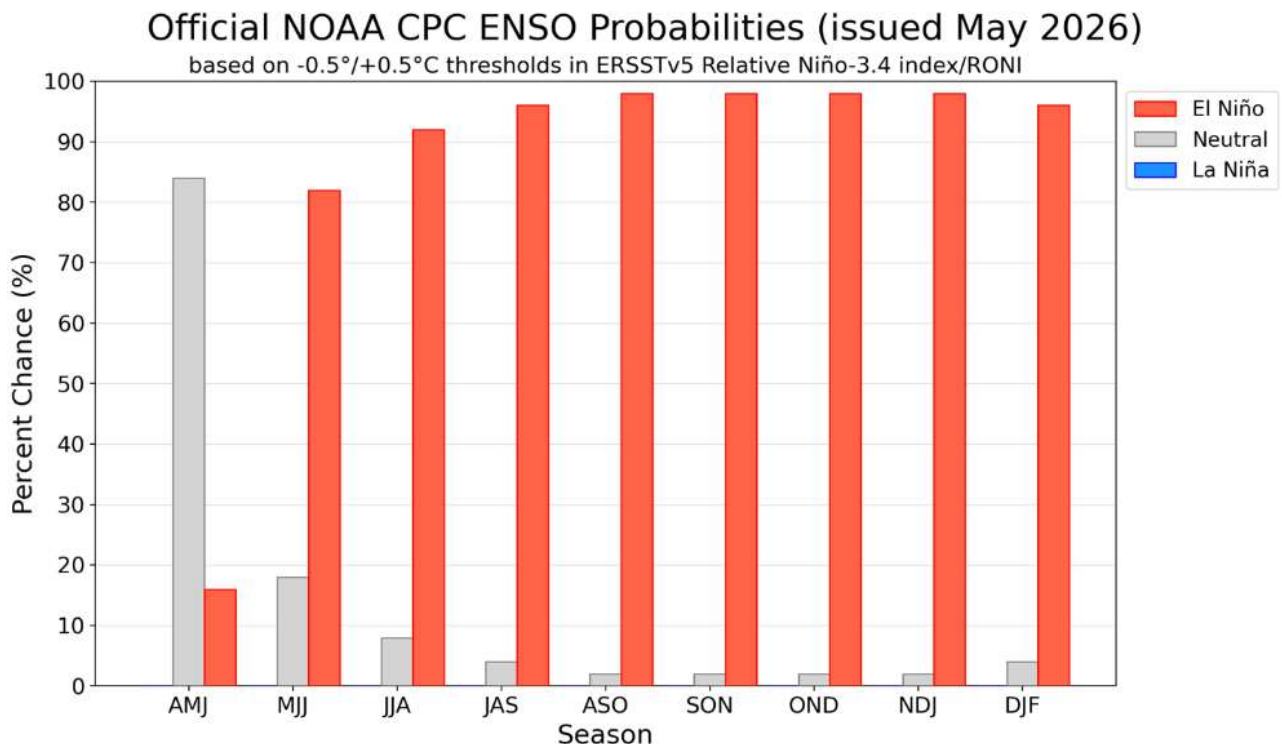
2025年の台風シーズンでは、合計27個の台風・熱帯暴風雨が発生し、そのうち13個が台風にまで発達しました。さらに、その13個のうち6個は、最大風速100ノット（約185km/h）以上の「非常に強い台風」となりました。シーズン中、最も強かった台風は「Ragasaラガサ」で、最大風速は145ノット（約270km/h）に達しました。Ragasaは9月17日にフィリピン海で発生し、9月22日には最盛期の勢力を維持したままルソン島北方を西へ進みました。その後、9月25日に中国南部に上陸をしました。昨シーズンにおいて特に影響が大きかった地域は、フィリピン、ルソン島中部から台湾にかけてでした。一方、日本へ影響を与えた台風はありませんでした。

今シーズンはこれまでに5個の台風・熱帯暴風雨が発生しています。その中には、4月中旬にスーパー台風「Sinlakuシンラク」がサイパンおよび北マリアナ諸島を直撃し、大きな影響をもたらしました。

El Nino エルニーニョ現象 / La Nina ラニーニャ現象

北西太平洋における台風活動を左右する主な要因の一つが、エルニーニョ・南方振動（ENSO）の状態です。ENSOは、「海洋ニーニョ指数（ONI）」によって示されます。これは熱帯太平洋の「ニーニョ3.4海域」における海面水温の平年差を、3か月平均で計算したものです。海面水温が3か月間にわたり平年より0.5°C未満の場合「ラニーニャ現象」、逆に0.5°Cを超える場合は「エルニーニョ現象」と判断されます。

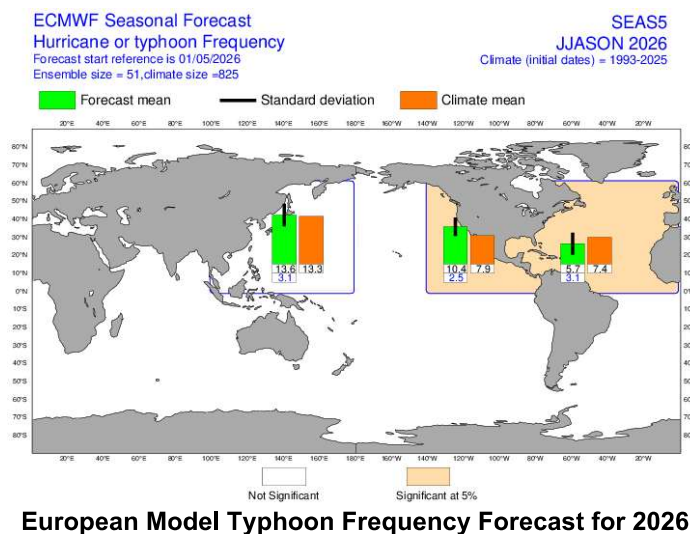
昨シーズンの熱帯太平洋の海水温は、中立状態から弱いラニーニャ傾向でした。2026年に入り、ラニーニャ現象は終息し、急速に発達するエルニーニョ現象へ移行しています。現在のところ、すべての気象モデルは夏から秋にかけて強いエルニーニョ現象が継続すると予測しています。今回のエルニーニョ現象は、観測史上でも最も強い事例の1つとなる可能性があり、南シナ海およびフィリピン周辺では下降気流が強まり、台風活動は抑制される見込みです。一方で、フィリピン東方海域から東シナ海、日本方面にかけて、台風の活動がより活発になる可能性があります。



出典：<https://iri.columbia.edu/our-expertise/climate/forecasts/enso/current/>

ヨーロッパの気象モデルにおける予報

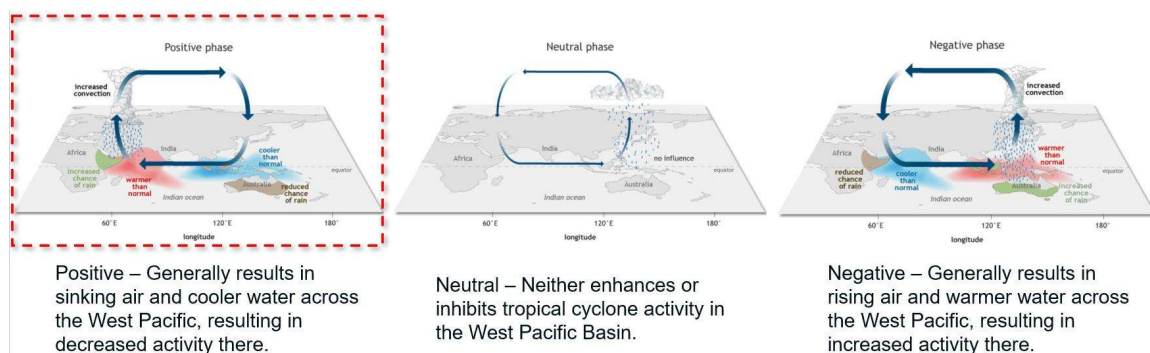
毎年、ヨーロッパの気象モデルは世界各地における季節的な熱帯低気圧予測を発表しています。2026年については、同モデルは6月から11月にかけて平年並みとなる23個の熱帯低気圧の発生を予測しており、そのうち13、14個が台風に発達すると見込んでいます。なお、これらの数値には、すでに発生した5個の熱帯低気圧および台風1つは含まれておりません。



インド洋ダイポール (IOD)

北西太平洋の台風活動に大きく影響する要因の一つに、「インド洋ダイポールモード (IOD)」があります。IODとは、インド洋東部と西部域における海面水温の差により定義されます。

現在のところ、今シーズンは「正のIOD」となる見込みであり、このため、今シーズンにおいて南シナ海およびフィリピン周辺における台風の発達を抑制する要因になると推測されています。



出典: <http://www.bom.gov.au/climate/enso/#tabs=Indian-Ocean>

海面水温度

北西太平洋では、台風シーズン中は通常、海水温が十分高いため、台風発生の大きな制約要因になることはありません。ただし、これまでのところ南シナ海とフィリピン海において海面水温が平年を下回っています。台風の発生そのものを妨げるほど低い海水温ではありませんが、非常に強い大型台風の発生数は限られる可能性があります。一方、台湾から日本北部にかけての海面水温は平年を大幅に上回っており、強い台風が発達しやすい環境になる見通しです。

熱帯低気圧および台風の総数は平年よりやや多くなる可能性があるものの、その活動の多くはフィリピン東方海域に集中するとみられます。ルソン島から中国東部、日本にかけての地域では、今シーズンのリスクは平年並みとなる見込みです。

当社による台風発生予測

南シナ海中部から南部では、平年より台風の活動が少なくなるとみえています。

これまでに発生した5個の熱帯低気圧はいずれも、フィリピン海またはマリアナ諸島付近で発生しており、この傾向は2026年も継続する見込みです。熱帯低気圧および台風の総数は平年よりやや多くなる可能性があるものの、その活動の多くはフィリピンの東方海域に集中するとみえています。ルソン島から中国東部、および日本にかけてのエリアでは、熱帯低気圧・台風による影響は平年並みと予想しています。

今シーズンにおける台風と熱帯低気圧の発生総数は28個と予測しており、これは過去30年間の平均出現数26個をやや上回る見込みです。台風の出現数は17個で、こちらも過去30年間の平均数16個を上回る見通しです。

最新の荒天関連情報はこちらをご覧ください

[StormGeo.com/weather-intelligence](https://stormgeo.com/weather-intelligence)